

入学時の日本語プレースメントテスト結果 から見る留学生の日本語能力の一考察

荒 まゆみ

A Study of Japanese Proficiency based on the Results of the Placement Test for Foreign Students at the Time of Enrollment

ARA, Mayumi

Abstract

This paper demonstrates two hypotheses based on the results of the Japanese Placement Test for foreign students at the time of enrollment of Shobi University. Then, it compares the change in achievement between the enrollment test and the test after one year of study. Finally, it shows the relationship of the scores the Japanese Language Proficiency Test, level N1 with the university placement scores.

要約

尚美学園大学で行われている留学生を対象とした入学時の日本語プレースメントテストの結果をもとに2つの仮説を実証する。次に、1年終了後の達成度判定テストとの比較、さらに日本語能力試験N1の得点との関係を検証する。

キーワード

入学時の日本語プレースメントテスト (英文表記)

1年終了時の達成度判定テスト (英文表記)

テストの信頼性・妥当性 (英文表記)

日本語能力試験 (Japanese Language Proficiency Test)

level N1

1. はじめに

尚美学園大学では外国語履修（8単位）が1～2年次の必修となっている。留学生は基本的に全員が日本語を選択することになっており⁽¹⁾、日本語クラスでは入学時と1年終了時にプレイスメントテスト（1年終了時は達成度判定テストとし、それをクラス分けに利用している）を行い、1年ごとにクラス編成を行っている。この両テストは本学で作成したものである。一クラス15名以下の少人数のクラスをいくつか配置している。何人かの日本語担当教員がそれぞれ異なるクラスを担当しているが、共通シラバスで授業を行っているため、クラスによって授業内容が大きく異なることはない。本学には総合政策学部と芸術情報学部があるが、芸術情報学部の留学生は人数が少なく、また日本語のレベルも比較的そろっているということで、プレイスメントテストは総合政策学部だけで行っていた。しかし、実際には芸術情報学部の留学生の日本語力に差がないわけではなかった。そこで、2013年に両キャンパスが統合されたのをきっかけに、全留学生にプレイスメントテストを行い、学部の垣根を越えた、それぞれのレベルに一番合ったクラスへ配置できるようにした。そして、全留学生の入学時のプレイスメントテストの得点がわかるようになったのをきっかけにそこから2つの仮説の実証を行った。また、1年終了時の達成度判定テストの結果との比較、さらには、日本語能力試験N1の得点との関係の考察を試みた。

2. プレイスメントテストの概要

2.1 入学時の日本語プレイスメントテストと1年終了時の達成度判定テストの内容と測りたい日本語能力

本学では入学時の日本語プレイスメントテストと1年終了時の達成度判定テストを使用してクラス分けを行っている。入学時のプレイスメントテストは経年変化を見るため、毎年同一の問題を使用し（問題Ⅶの作文のテーマは異なる）、一クラス15名以下になるようにクラスを分けている。表1に示す通り、文法、語彙、読解、文章力を測る出題をしている。1年の共通シラバスは「書く力」を伸ばすことを目標としたものになっており、文章を書く上で必要とされる文法力、語彙力を見る問題を60%出している。問題Ⅰの動詞の活用はほとんど初級項目であるが、基本的な動詞と接続表現の理解度を確認している。もし、これらの基礎力ができていない学生のクラスはその点から教えることが必要となる。それから、応用力として読解力を26%、文章力を見る問題を14%出している。本学では1年次の達成目標が「書く力」を伸ばすことであるので、問題Ⅰ（30点）、問題Ⅵ（4点）、問題Ⅶ（10点）の計44点は書かせる問題にしている（同一採点者）。表2は1年終了時の習熟度判定テストの内容である。1年の最終授業内で60分を使い行っている。1年間の達成度をみるための問題を2011年52%、2012年77%、2013年59%入れている。その他は応用問題である。このテストは年により若干問題を変えてはいるが、測りたい基本的な日本語力は

(1) 日本語能力試験、N1取得者で本人が日本語以外の言語の履修を希望した場合、日本語担当教員が面接を行い、N1の日本語力があるか確かめている。その上で許可をするかどうか決定。

同じである（2013年～2015年は同一問題）。このテストは2年生のクラス分けとしても使用している。一番レベルの高いクラスを特に特進クラスとし、10名以下の少人数クラスにして、上級レベルの日本語を身に付けさせるためのクラスとしている。また、一番下のレベルのクラスも習得に時間のかかる学生が含まれるため、10名以下のクラスにしている。テストでクラス分けを行った後、さらに日本語担当教師で最終的な検討を行う。J.D. ブラウン（2009）は「テストの得点だけに頼って学生を配置することは非常に無責任である（P.323）」と述べ、教職員との面接を行い、

表1 入学時の日本語プレースメントテスト

(60分、100点満点)

測る力／配点	問題	項目	出題目的
基礎力 (60点)	問題Ⅰ	動詞の活用	作文のための基本的な文法力をみる
	問題Ⅱ	・接続詞（接続表現） ・授受動詞	
	問題Ⅲ	語順（連帯修飾を中心に）	
応用力 (40点)	問題Ⅳ	指示語他	読解力をみる
	問題Ⅴ	内容理解	いくつかの接続表現を用いて、意味の通る文にできるか
	問題Ⅵ	接続表現の応用	
	問題Ⅶ	文法、語彙力とともに、表現力、知識を測る	作文力をみる

表2 1年終了時に行う習熟度判定テスト

(60分、100点満点) ※2013年からの問題

問題/配点	項目	出題目的	レベル
問題Ⅰ (8点)	動詞の活用（自動詞、使役形の使い方が理解できているか	基本的な文法力がついているか	1年次の既習項目中～上級
問題Ⅱ (10点)	日本語能力試験N1～N2レベルの機能語	日本語能力試験N1～N2レベルの文法の理解	
問題Ⅲ (12点)	・主語と動詞の呼応 ・副詞との呼応	文法力一文の呼応ができていますか	
問題Ⅳ (9点)	語彙（動詞、接続語）	学術的文章の構成要素に見られる語彙が理解できているか	
問題Ⅴ (15点)	書くときの文体	文体が理解できているか	
問題Ⅵ (6点)	短文作成	文法力、読解力	
問題Ⅶ (21点)	短文読解	読解力、漢字力	応用問題 上級
問題Ⅷ (12点)	中文読解	読解力、文章の中の文法	
問題Ⅸ (7点)	グラフの読み	・グラフ特有の表現が使えるか ・グラフを的確に読み取り、その背景も考察できるか	1年次既習 項目上級

面接で得た情報も考慮に入れて決定するとしている。また、「面接をすることでテストの得点だけよりも正確に学生たちを配置できる。配置が数多くの情報源を総合して行われるからである(P.323)」としている。本校では面接は行っていないが、1年間担当した教師が学生の性格、友人関係等を熟知しており、それら担当者の意見を取り入れ、それぞれの学生に一番合うクラスに配置できるようにしている。

2.2 入学時の日本語プレースメントテストの結果

2011年からプレースメントテストの結果によってクラス分けを行ってきた。2011年、2012年は入学式当日ではなく、前日のオリエンテーション終了後にプレースメントテストを行っていたため、留学生の集まりが悪く、プレースメントテストを受けていない留学生が多かった（2011年度総合政策学部の留学生68名中35名受験、2012年度総合政策学部の留学生73名中56名受験）。2013年からは入学式の当日に行うようにしたため、2013年からの受験者はほぼ100%となった。表3は2011年～2015年のプレースメントテストの平均点、最高点、最低点、及び標準偏差を示したものである。2011年～2012年は総合政策学部のみ、2013年～2015年は総合政策学部、芸術情報学部の両学部を合わせた結果である。これを見ると、平均点は毎年50点台で、2014年が51.58点と一番低く、2015年が58.19点が一番高くなっている。各年度の最高点を見ると2011年76点、2012年92点、2013年88点、2014年93点、2015年100点となっている。2013年からは両学部の留学生が受験するようになったが、2013年からの3年間の最高点はいずれも芸術情報学部の留学生の得点である。次に、得点のばらつきを見るためにヒストグラムにしたものが図1である。2011年と2012年は60点台が、2013年と2014年は40点台が一番多く、30点以下の学生も他の年と比べ多くなっている。しかし、2015年はまた50点台、60点台が増え、70点以上の学生も多くなっている。点数のばらつきを見ると、2014年～2015年は大きくなっている。日本語力の高い留学生も増えているが、レベルも分散していることがわかる。

表3 2011年～2015年の入学時の日本語プレースメントテストの結果

	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
受験者数	35名	56名	75名	51名	47名
平均	57.2	55.17	55.39	51.58	58.19
最高点	76	92	88	93	100
最低点	25	20	24	11	21
標準偏差	24.5	36	32	41	39.5

※2011年～2012年総合政策学部のみ、2013年～2015年総合政策学部、芸術情報学部の両学部

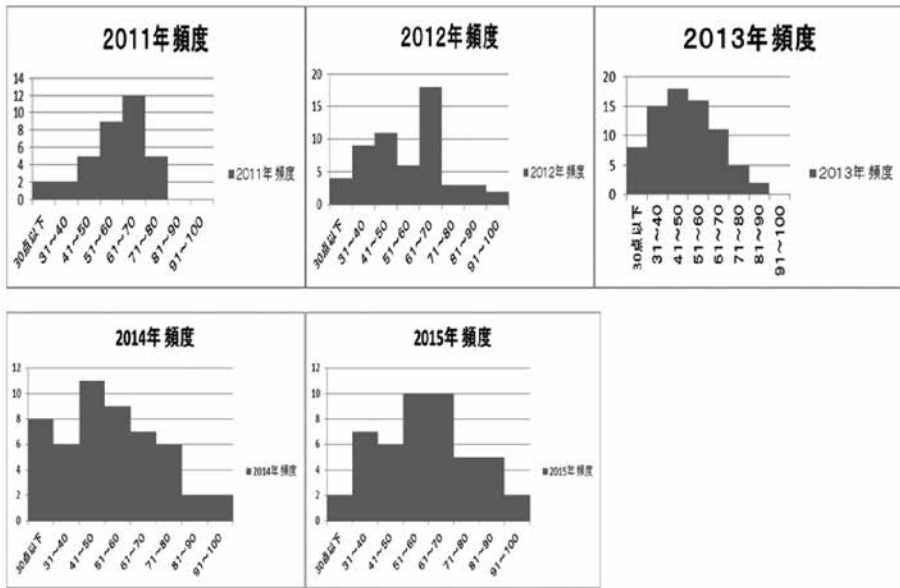


図1 2011年～2015年の入学時の日本語プレースメントテストの点数のヒストグラム

2.3 入学時の日本語プレースメントテスト、及び1年終了時の達成度判定テストの信頼性

本学におけるプレースメントテストの実施は2011年からである。すでに5年目を迎えるが、特にクラス分けに支障をきたす問題もなく、総合政策学部の1年生を15名以下の6クラス（2015年は3クラス）に分けてきた。今回、入学時の日本語プレースメントテストの結果から本学の留学生の日本語力に関するいくつかの検証を試みるにあたり、まず本校で作成したこれら2つのテストの信頼性を検証することにした。テストの信頼性は内部一貫性法で算出した。方法は以下のキューダー・リチャードソン公式（K-R20）を採用した。

$$K-R20 = k/k - 1 (1 - \sum IV / St_2)$$

K-R20 = キューダー・リチャードソン公式20

K = テスト項目数

IV = 項目分散

St₂ = テスト全体の分散（得点の標準偏差の二乗）

まず、2012年度の新入留学生に行った日本語プレースメントテストの信頼性の測定を行う。テストの項目数37、項目分散の合計7.10、平均値20.39、標準偏差6.29を公式に当てはめると、次のようになる。

$$K-R20 = 37 / (37 - 1) (1 - 7.10 / 6.29の二乗) = 1.02 \times 0.82 = 0.83$$

また、2013年度の新入留学生に行った日本語プレースメントテストの信頼性を見ると、テストの項目数37、項目分散の合計7.39、平均値18.9、標準偏差6.08で、0.82となる。

次に、2012年度に行った1年終了時の達成度判定テストの信頼性の測定を行う。テストの項目数33、項目分散の合計6.10、標準偏差5.15を公式に当てはめると、次のようになる。

$$K-R20 = 33 / (33 - 1) (1 - 6.10 / 5.15 \text{の二乗}) = 1.03 \times 0.77 = 0.79$$

また、2013年度の達成度判定テストの信頼性を見ると、テストの項目数40、項目分散の合計8.12、標準偏差6.24で、0.80になる。大友・中村（2004）によれば、「信頼性係数は0.000から+1.000の数値となり、1.000に近ければ近いほど信頼性の高いテストだと解釈できる。どのくらいの信頼性があればよいのか、という点についても、諸説あるが、一般には0.800が一つの目安になろう。信頼性係数とテストの項目数には、一定した関係が認められ、項目数が増えればそれだけ信頼性係数も高くなる（p.99）」としている。今回算出した信頼性係数はどちらのテストも0.8以上あるので、信頼性は高いと考えられる。2012年度の達成度判定テストのみ0.79であるが、2013年度からは信頼係数0.8の問題を使用している。もちろん、項目数をもっと増やして信頼性係数をさらに高めることもできるが、本学においてはこれ以上項目数を増やすことは妥当ではないと考える。なぜなら、まず、入学時の日本語プレースメントテストは入学式やオリエンテーションが続く中で1時間を取って行われるので、学生の疲労が考えられる。1年終了時のテストは慣れた教室での、しかも授業内の60分を使うので環境による問題は少ないと思われるが、授業単位に関わるテストではないために適当に答える学生がいなくても限らない。実際にどのクラスでもよいといった学生の声を目にしたこともある。したがって、これ以上問題数を増やすことはプレースメントテストの結果にさまざまな誤差を生じさせかねない。次に、テスト項目難易度分析を行うと入学時の日本語プレースメントテストは項目難易度が0.05～0.92（易しすぎると考えられる0.9以上の項目は2項目、逆に0.2以下の難しすぎると考えられる項目は3項目）、1年終了時の達成度判定テスト項目難易度は0.04～0.76（0.9以上はなし、0.2以下は7項目）となっている。入学時の日本語プレースメントテストで難しすぎると考えられる項目が3項目あるが、これらはすべて初級で習う基本の活用である。石原（2004）は入学直後の留学生の不安を考えると、易しすぎる項目の必要性もあるが、ただ易しければよいのではなく、ある程度難易度の高い項目も必要だと述べている。実際は留学生にとってこれらの難易度の高い（と思われる）問題は彼らが初級項目として目にしていないものばかりである。1年終了時の達成度判定テストでは難しすぎる項目が7項目もある。しかし、これらは初～中級レベルの動詞の活用と1年の既習項目である文体の問題である。これらはすべて書かせる問題にしている。選択肢問題にすれば、得点は高くなるであろうが、これらは本来書けなければならない問題ばかりである。習熟度の低いこれらの項目は2年でも押さえていく必要があるだろう。さらに、クラス分けについて、吉田（2009）は「妥当性と信頼性に加えて、テストを大学などで実際に実施し、習熟度別クラス分けとして用いるためには、テストの実用性も考慮されるべきである（p.99）」としている。本学では入学時の日本語プレースメントを入学式当日に行い、その日のうちには採点、クラス分けを済ませている。また、1年終了時の達成度判定テストは1年の最終授業内の60分を使用して行い、数日のうちには採点、クラス分けをして、日本語担当教師との検討会に入れるようにしている。以上、プレースメントテストとして本学で行っている入学時の日本語プレースメントテストと1年終了時の習熟度判定テストの信頼性、及び、実用性を検証してきたが、プレースメントテストとしては有効であるこ

とが立証された。

3. 先行研究

プレイズメントテストは多くの語学教育現場で行われている。もちろん大学においても例外ではない。プレイズメントテストを独自で開発し使用している大学もあれば、外部のテストを使用している大学もある。近年入学の形態が多様化し、学力に差のある学生が同じ大学に入学するようになったことで、習熟度別のクラス編成の必要性が高まっていることが多くの大学で報告されている。プレイズメントテストの先行研究では日本人の英語授業においてのものが数多く見られる。テストを行った結果からその信頼性・妥当性を検証したものが多い。SHIZUKA・MOCHIZUKI (2014) は外部試験の利点と問題点を挙げ、新テストの開発を通し、そのテストの妥当性を検証している。また、TOEICスコアを予測するための代替テストとしても十分な実用性が認められたことを報告している。吉田 (2009) はプレイズメントテストの目的と方法について論じ、大学で汎用されている代表的な英語プレイズメントテスト (G-TELP、TOEIC Bridge、ACE Placement、CASEC) を言語テストの妥当性、信頼性、実用性の観点から分析している。前田 (2010) はG-TELPを2年間使ったのクラス編成の結果を古典的テスト理論に基づいて分析し、その信頼性と妥当性を検証している。これによると、G-TELP (文法と読解だけ使用) の結果で行ったクラス配置は信頼性・妥当性が低く、適切ではなかったことを報告している。竹安・三重野・船田・内山・松田 (2015) は別府大学で独自に作成したプレイズメントテストについて論じている。教養英語のクラスを習熟度別に編成するためのプレイズメントテストの妥当性について次元性を確認することで、また外部テスト (TOEIC IPテスト) の結果との相関を調べることで検証している。そして、授業の教育効果の測定を行い、授業改善のヒントを得たとしている。市原・井上・佐藤・鈴木・長谷川・丸本・水口 (2007) はプレイズメントテストの得点とストレート卒業率、離学率の関係について調べ、テストの得点が下がるにつれて、ストレート卒業率、離学率が高くなることを報告している。一方、留学生対象の日本語クラス編成の研究に関しては、奥野・丸山・四方田 (2007) が学部留学生の日本語教育の充実を目指し、教養教育日本語科目の新設やそれに伴うプレイズメントテストの開発を行ってきた活動を報告している。プレイズメントテストの分析により、適切なレベル配置が行われてきたことを確認し、さらには上級者にも見られる文法上の課題を明らかにしている。今尾 (2009) はプレイズメントテストの結果から学部留学生の日本語力の分析を行い、恩恵の授受を用いた表現、使役形を使った許可を求める表現の正答率が低いことを報告している。市原・井上・佐藤・鈴木・長谷川・丸本・水口 (2007) は編入留学生について触れ、新入留学生と編入留学生の日本語力に逆転現象が見られることを報告している。本来日本語力があるものとみなされて入学している3年次編入生の日本語力が低いことを挙げ、プレイズメントテストの得点が一定基準に満たなかった場合は、日本語クラスの履修を勧告していることを述べている。やはり入試制度の多様化で日本語力に大きなばらつきがあり、得点の低い学生の対応策を再考する必要性や各学部の教員との連携の必要性も挙げている。いわゆるテストの信頼性・妥当性の検証は日本語教育の現場でも行われている。宮岡・玉岡・酒井 (2014) は集団基準準拠テストの開発における高い信頼性を持つことを目指した日本語の文法

テストを開発し、その信頼性係数を示している。

4. 研究目的

本学においても入学時の日本語プレースメントテストの結果を利用して留学生の日本語力を多方面から分析しようとするのが本研究の目的である。学部留学生が400名に上る本学であるが、今まで全留学生の日本語力を測ることは行ってこなかった。唯一全留学生が受ける2度のプレースメントテストは留学生をレベルに合ったクラスに配置するためのものでしかなかった。テストの信頼性、妥当性の検証は先行研究でも多いが、本研究でも今回本学作成のこれら両テストの信頼性をまず検証した。その結果、信頼性が立証されたことにより、入学時の日本語プレースメントテスト結果から留学生の日本語力の実態を調査することにした。また、ほとんどの留学生が目標とする日本語能力試験に照準を当て、入学時のプレースメントテストの得点と日本語能力試験N1との相関を調べ、さらに両テストの得点の関係を具体的に確認し、日本語能力試験N1に合格する可能得点をプレースメントテストの得点から割り出す。

5. 研究方法

5.1 仮説の実証

仮説1：留学生の日本語力は年々下がっている

仮説2：「芸術情報学部」の留学生の方が「総合政策学部」の留学生より日本語力が高い

以上の2点を仮説として立て、入学時のプレースメントテストの結果から実証を試みた。この説は日本語を担当する教師や留学生担当者が漠然と感じていたことである。

5.1.1 仮説1の実証

仮説1：留学生の日本語力は年々下がっている

2011年～2015年（2011年～2012年は総合政策学部の留学生のみ、2013年～2015年は芸術情報学部も含めた全留学生）の入学時のプレースメントテストの得点は年々下がってきているのだろうか。表3に示した通り、年ごとの平均点は毎年50点台であるが、2014年は51.58点と5年間の中で一番低い得点となっている。しかし、2015年には58.19点と5年間で一番高くなっている。図1のヒストグラムを見ると、点数のばらつきはあるものの年々日本語力の高い学生が増えてきていることがわかる。そこで、2011年～2015年の入学時の日本語プレースメント結果から一元配置の分散分析を行った。その結果P値は.189で5%より高く有意差は見られなかった。したがって、統計学的見地からは、留学生全体から見ると、日本語力が年々低下しているとは言えないという結果になった。表4に示す通り、総合政策学部と芸術情報学部の留学生を分けて比べても、両学部とも2013年から2015年までの平均点は年々上がっている。

5.1.2 仮説2の実証

仮説2：「芸術情報学部」の留学生の方が「総合政策学部」の留学生より日本語力が高い

2013年に「総合政策学部」と「芸術情報学部」のキャンパス統合が行われた。それにより留学生の日本語クラスを「総合政策学部」と「芸術情報学部」で分ける必要がなくなり、全留学生にプレイスメントテストを行い、適切なクラスへ配置することが可能になった。以前から「総合政策学部」はプレイスメントテストの結果により、いくつかのクラスに分けていたが、統合以前の「芸術情報学部」は留学生の数が少なく、また、比較的日本語能力のレベル差もないと思われ、クラス分けは行わず長年1クラスとしていた。しかし、実際は能力差がないわけではなかった。筆者が2008年度に「芸術情報学部」の日本語クラスを担当したときは、1年生が21名、2年生が12名のクラスであった。春学期の中間、期末の結果を示すと、1年生の中間試験は最高点が92点で最低点が18点、期末試験は最高点が98点、最低点が29点であった。また、2年生の中間試験は最高点が96点、最低点が16点、期末試験は最高点が93点、最低点が19点であった。中には初級の教科書も終わっていない学生もいた。このように点数のばらつきは大きく、また1年生の人数は21名と多く、「芸術情報学部」留学生の日本語クラスを分けなくてもよい理由は全くなかった。2013年の統合によって、初めて全留学生にプレイスメントテストを行うことができるようになった。そして、「総合政策学部クラス」「芸術情報学部クラス」という分け方ではなく、レベル別にそれぞれが一番適したクラスで日本語の勉強ができるようになった。それをきっかけに以前から日本語担当の教師や留学生担当者の間で言われていた「芸術情報学部」の留学生の方が日本語力が高いというのがはたして本当なのか、試験結果を分析してみることにした。2013年～2015年の入学時の日本語プレイスメントテストで比較を行った。表4はその結果を示したものである。図2は3年間の両学部の平均点をグラフにしたものである。

表4 入学時の日本語プレイスメントテスト
 -各年度の学部別平均点（100点満点）、及び標準偏差-

年度	総合政策学部			芸術情報学部		
	2013年	2014年	2015年	2013年	2014年	2015年
人数	66人	40人	28人	9人	11人	19人
平均	48.83	48.8	53.21	55.88	61.72	65.52
標準偏差	14.18662	17.60306	15.43733	20.50173	23.82928	18.47151

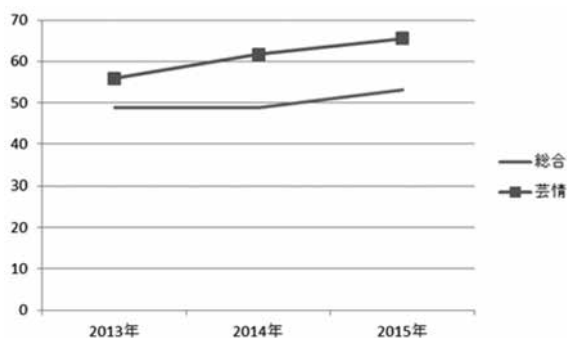


図2 入学時の日本語プレイスメントテスト
 -2013年～2015年の両学部の平均点-

平均点を見ると、どの年も「芸術情報学部」の方が高い。2013年は7点ほどの開きであるが、2014年は12.92点、2015年は12.31点の開きになっている。さらにt検定を行ってみると、それぞれのP値は2013年.099、2014年.030、2015年.009であった。2013年のP値は5%以上で両学部での有意差は見られなかったが、2014年、2015年のP値は5%以下となり、2014年と2015年の留学生は「芸術情報学部」の方が日本語力が高いと言える結果となった。2013年以前の芸術情報学部のプレースメントテスト結果のデータがないため、以前から両学部の留学生の日本語力にこのような差があったかどうかは調べることはできないが、少なくとも2014年以降は「芸術情報学部」の留学生の方が日本語力が高いことがわかった。しかし、標準偏差は「芸術情報学部」の方が大きく、日本語力のばらつきが大きいことがわかる。

5.2 入学時の日本語プレースメントテストと1年終了時の達成度判定テスト結果との比較

次に入学時の日本語プレースメントテストと1年終了時の達成度判定テストの結果から留学生の日本語力の推移を見てみる。入学時の日本語力は相対的に1年後も変わらないのか、あるいは1年間の勉強で違いが出るのか分析を試みた。対象は両方のテストを受験した2012年度の新入生44名、2013年度の新入生62名、2014年度の新入生34名、合計140名の留学生である。

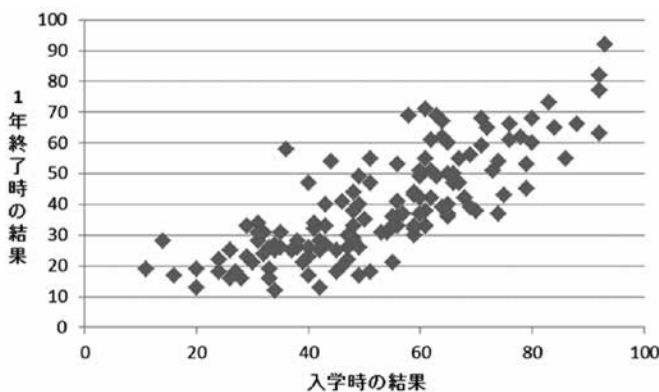


図3 入学時の日本語プレースメントテストと1年終了時の達成度判定テストの結果の散布図（両方のテストを受験した留学生140名対象）

図3に入学時の日本語プレースメントテストと1年終了時の達成度判定テストの結果の散布図を示した（2012年44名、2013年62名、2014年34名、計140名）。これを見ると両者の間には関連性があるのではないかと考えられる。そこで相関係数を求めてみると、2012年0.87、2013年0.74、2014年0.86で、3年間すべて合わせた相関係数も0.79と1に近い数字になった。よって、少なくとも統計学的には強い正の相関関係が見られる結果となった。実際に1年と2年でレベルの異なるクラスになる留学生はほとんどいない。今回の分析で関連性が高いことが裏付けられたわけである。日本語クラスはいくつかあり、担当する教師も異なるが、共通シラバスのもとに授業が行われており、授業内容に大きな差がないことが起因しているものと考えられる。表5は2012年から2014年の入学時の日本語プレースメントテストと1年終了時の達成度判定テストの結果を示したものである。入学時と1年後の両方のテストを受けた学生のみを対象にしている。入学時の平均

点はいずれの年も50点台であるが、1年終了時の平均点はかなり下がり、2012年度37.29点、2013年37.74点、2014年43.32点となっている。1年終了時の達成度判定テストの方が難易度は高いものの平均点の低さが目立つ。

表5 入学時の日本語プレイズメントテストと1年終了時の達成度判定テストの平均点
(両方のテストを受けた留学生140名対象)

	2012年度 (44名) (総合政策学部のみ)	2013年度 (62名) (総合政策学部+ 芸術情報学部)	2014年度 (34名) (総合政策学部+ 芸術情報学部)
入学時の平均点	57.15	50.72	50.02
1年終了後の平均点	37.29	37.74	43.32

表6 入学時の日本語プレイズメントテストと1年終了時の達成度判定テストの問題別平均点

入学時 (2012年度)

問題	I	II	III	IV	V	VI	VII
出題項目	動詞の活用	接続詞・授受	文法 (語順)	読解 (指示語)	読解 (内容理解)	接続表現	作文力
平均点/ 配点	13.9/30	12.8/18	7.4/12	6/8	11.8/20	1.8/5	3.3/7

1年終了時 (2012年度)

問題	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
出題項目	動詞の活用	2級文法	文の呼応	語彙	文体	短文読解	要約	グラフの読み
平均点/ 配点	1.1/15	9.8/20	8.7/18	3.7/9	5.6/15	4.8/8	0.8/7	2.5/8

※問題VII 2012年度は要約

表6は2012年度の入学時の日本語プレイズメントテストと1年終了時の達成度判定テストの問題別平均点である。これを見ると入学時、1年後ともに問題Iの動詞の活用の得点の低さが目立つ。1年後も依然定着できていないことがわかる。今尾(2009)の報告にもあるが、本学の留学生も恩恵の授受を用いた表現、使役形を使った許可を求める表現の正答率が低い。1年終了時のテストに2012年は既習項目(問題II~V、VIII)を77%出題している。1年の既習項目の定着の低さも窺える。表7は2012年度の総合政策学部の入学時の日本語プレイズメントテストと1年終了時の達成度判定テストの平均点とクラスごとの得点範囲である。2012年の総合政策学部は入学時の日本語プレイズメントテストでそれぞれ11~13名のクラスになるように最高点92点から最低点20点のレベルを6クラスに分けた。各クラスの得点範囲は①クラスと⑥クラスを除けば、わずか5点前後の開きしかない。1年後の得点は各クラスの学生の得点がどのようになったかを示したものである。①クラスの92~68点だった学生の1年後の結果は77~38点の範囲になった。1年終了時の得点は入学時の得点よりかなり低いものの、クラスごとの平均点を見ると、ほとんど変化のないことがわかる。

表7 入学時の日本語プレイスメントテストと1年終了時達成度判定テストのクラスごとの平均点と得点範囲（2012年総合政策学部）

	入学時		1年終了時	
受験者	44名		44名	
全体の平均点	55.17点		37.29点	
	クラスの 得点範囲	クラスの 平均点	クラスの 得点範囲	クラスの 平均点
①クラス	92～68点	77.75	77～38点	53.41
②クラス	66～62点	64	61～36点	44.77
③クラス	61～56点	59.42	38～30点	33.57
④クラス	51～49点	47.2	29～17点	25.6
⑤クラス	40～34点	36.8	31～17点	24.8
⑥クラス	33～20点	28.3	25～13点	18.33

5.3 日本語能力試験受験者の得点の分析

5.3.1 日本語能力試験対策講座の受講状況

日本語能力試験（Japanese Language Proficiency Test）（以下JLPT）N1合格は本学の留学生にとって、卒業までの大きな目標になっている。入学時のアンケートに大学4年間の目標を書かせると、ほとんどの留学生がJLPT、N1合格と書く。これら留学生のニーズに応えるため2006年度から日本語能力試験対策講座の科目が設けられた。2006年の春学期の受講生は5名であった。この中には4年になって初めてJLPT、N1を受けるといふ学生や何度か受けたが合格できないという学生もいて、受講者は少ないながら合格したいという意識は高かった。2006年度は春学期のみの開講でスタートしたが、12月の試験を受けるのに、どうして春学期までしか授業がないのかと、学生が自ら大学側に掛け合い、秋学期（12月の試験までの8回のみ）の開講が許可された（JLPTは2009年より7月と12月の年2回になったが、それ以前は12月の年1回の試験だった）。結果は最後まで出席した2名の学生は合格することができた。本学は日本留学試験200点以上かJLPT、N2レベルの日本語力があることが受験の条件であるため、N1未受験か受けたことはあっても合格していない留学生が大多数を占める。表8は各年度の受講状況を示したものである。2006年から2010年までは受講できるのが3～4年生に限られていたため、受講生の数は多くないが、2011年から全学年対象となり、受講生は一気に増えた。2010年秋学期のみ担当教員の都合で開講されなかったが、それ以外は春、秋学期の年2回の開講となっている。1年から受講できるようになった2011年度は春学期46名、秋学期30名の人数になり、とても試験対策のできる状況ではなかった。そのため、2012年は2クラスに分けて行ったが、それでも春学期の水曜クラスは27名、木曜クラスは41名に上った。2013年からは学部留学生の数が減ってきて、また1クラスに戻したが、それでもまだ1クラスの人気は30名前後に及んでいる。学年別に見ると、1～3年生がほぼ同数、4年生はその半数となる。3年編入で入ってきた留学生や聴講生、また春学期に単位は取ったものの、秋学期も聴講する留学生もいる。大学1～2年の日本語の必修クラスが終わり、3年になってからJLPT、N1を受験するという留学生が多く、中には4年になってから受ける者もいる。もともと留学生の要望から開講された日本語能力試験対策講座であるので、出席率100%で積極

的な留学生はそれなりの結果を出している。ただ単位取得のためだけに履修している留学生やできればJLPT、N1に合格できればよいという消極的な学生は多人数のクラスで埋没している。

表8 各年度の日本語能力試験対策講座受講状況

年度	学期		受講生の数	対象学年
2006年	春学期		5名	3～4年生 対象
	秋学期		2名	
2007年	春学期		※データ不明	
	秋学期		※データ不明	
2008年	春学期		6名	
	秋学期		5名	
2009年	春学期		12名	
	秋学期		13名	
2010年	春学期		13名	
	秋学期		開講なし	
2011年	春学期		46名（1年18名、3年20名、4年8名）	1～4年生 対象
	秋学期		30名（1年13名、3年13名、4年4名）	
2012年	春学期	水曜	27名（1年7名、2年6名、3年10名、4年4名）	
		木曜	41名（1年6名、2年13名、3年17名、4年5名）	
	秋学期	水曜	18名（1年10名、2年2名、3年5名、4年1名）	
		木曜	6名（1年6名）	
2013年	春学期		36名（1年10名、2年13名、3年8名、4年5名）	
	秋学期		29名（1年11名、2年8名、3年4名、4年6名）	
2014年	春学期		20名（1年3名、2年15名、3年1名、4年1名）	
	秋学期		28名（1年12名、2年11名、3年5名）	

5.3.2 入学時の日本語プレースメントテストの結果とJLPT、N1得点との関係

本学の留学生にとって卒業までに（帰国するまでに）取得しておきたいJLPT、N1ではあるが、一体どのくらいの留学生が合格しているのか正確な人数は把握できていなかった。それぞれ個人で申し込みをしており、どのくらいの留学生が受験しているのかさえもわからなかった。合格した学生は合格証明書を国際交流センターに持っていけば、受験費用が奨学金として給付されるため、大体の合格者の人数はわかっていた。しかし、留学生全員がこの奨学金のことを周知していたかどうかは定かではないし、12月の試験の結果は2月になるため、春休みで帰国していて、申請し忘れる留学生もいたと考えられる。そのような状況ではあるが、申請のあった留学生数を示すと、2009年度27名（学部留學生総数467名）、2010年度13名（学部留學生総数476名）、2011年度15名（学部留學生総数430名）、2012年度17名（学部留學生総数382名）、2013年度17名（学部留學生総数380）となっている。2014年からは大学が受験者を取りまとめ、団体申込みを始めたため、受験生の結果が大学でもわかるようになった。2014年の1回目の受験者数は48名、合格者は12名（学部留學生総数332名）、2回目の合格者は6名（2回目は団体申込みをしていないため受験者数

は未定)である。2015年の1回目の受験者数は40名、合格者は14名(学部留学生総数294名)である。大学が団体申込みをするようになったとはいえ、個人で申込みをしている留学生もいないとは限らない。しかし、それらを考慮しても、受験者、合格者とも多い数字ではない。結局、合格しないまま卒業する留学生が多い。入学時の日本語プレースメントテストの得点が低い留学生は大学4年間でも合格することは難しいのだろうか。ここでは入学時のプレースメントテストの得点がどのくらいあれば、N1に合格しているのかを調べてみた。2012年から2015年のN1受験者で入学時のプレースメントテストを受けている学生は54名である。今回はこの54名のデータの分析を行った。図4はJLPT、N1受験者の得点とその受験者の入学時の日本語プレースメントテストの得点の散布図である。縦軸がJLPTの得点で横軸が入学時の日本語プレースメントテストの得点である。JLPT、N1は満点が180点で、100点以上が合格となる。

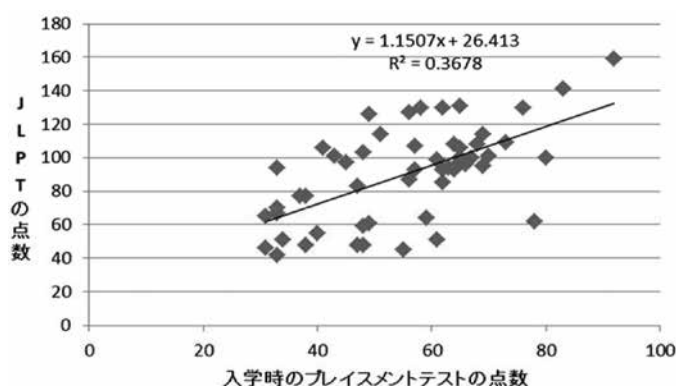


図4 JLPT受験者とその受験者の入学時の日本語プレースメントテスト結果の散布図

JLPT、N1受験者の得点と入学時の日本語プレースメントテストの結果との相関分析を行うと、相関係数が0.60で両者には関連が見られる結果となった。(同時に入学時の日本語プレースメントテストは一定の妥当性があることも認められた。)次に、プレースメントテストの得点とJLPT、N1の得点の関係をより具体的に確認するために回帰分析を行った。すると、表9のようになった。

表9 回帰分析 (n=54)

変数	係数	標準誤差	P値
切片	26.41	12.06	< .05
プレースメントテストの得点	1.15	0.20	< .05

図4の散布図上の回帰式と表9の回帰分析の結果、入学時の日本語プレースメントテストで64点以上の得点があればJLPT、N1に合格する可能性が高いことがわかった。2013年から2015年までの64点以上取得者の割合は表10に示した。64点以上取っている留学生の割合は2013年18%、2014年29%、2015年31%となっている。統計学的にはこれらの留学生はJLPT、N1に合格する可

能性が高いということになる。受験者数と合格者数のわかる2014年と2015年のそれぞれ1回目の合格者の割合は2014年25%（48名中12名合格）、35%（40名中14名合格）となっており、入学時の日本語プレイスメントテスト64点以上の留学生の割合とほぼ同じ数字になっている。

表10 2013年～2015年の入学時日本語プレイスメントテスト64点以上取得者の割合

年度	64点以上取得者の割合
2013年度	18%
2014年度	29%
2015年度	31%

しかし、回帰分析による決定係数R²は0.36とやや低い値であるので、JLPT、N1合格者はプレイスメントテスト以外の要素が関係していることが考えられる。今回の分析により入学時のプレイスメントテストで得点が高い留学生ほどN1に合格する確率が高いことはわかったが、それだけではない要因があることも明らかになった。2012年～2015年のJLPT、N1合格者を見ると、入学時の日本語プレイスメントテストの得点が50点以下の留学生が4名いる。表11にこの4名の日本語能力試験対策講座の履修状況と昼休みの日本語講座 - プチレッスン - の受講の有無と受講状況を示した。昼休みの日本語講座 - プチレッスン - とは、授業日の月曜から木曜の昼休み、12時40分から12時55分の15分間行っている補講のことである。主にJLPT、N1対策（特に文法）を行っている。荒（2013）の研究で昼休みの日本語講座 - プチレッスン - への出席回数が多い学生ほどJLPT、N1の合格率が高くなっていることが報告されている。

表11 入学時のプレイスメントテスト50点以下の留学生の「日本語能力試験対策講座」の履修状況と昼休みの日本語講座-プチレッスン-の受講の有無と受講状況

留学生	入学時の日本語プレイスメントテストの得点	JLPT、N1の得点	「日本語能力試験対策講座」履修状況	昼休みの講座 - プチレッスン - 受講の有無と状況
S ₁	41	106 (2012年2年生で合格)	2011年 ・春学期出席率80% ・秋学期出席率73%	・2011年春季学期30回 ・2011年秋季学期30回 ・2012年春季学期12回 ・2012年秋季学期3回
S ₂	49	126 (2013年3年生で合格)	2012年 ・春学期出席率66%	受講なし
S ₃	48	103 (2014年3年生で合格)	2012年 ・秋学期出席率100%	受講なし
S ₄	43	101 (2015年3年生で合格)	2013年 ・秋学期出席率100%	受講なし

留学生S₁は入学時のプレイスメントテストの得点は41点であるが、2年生でJLPT、N1に合格している。S₁は1年生のとき日本語能力試験対策講座に春学期、秋学期とも出席している。春学期に単位を取得しているため、秋学期は聴講生としての参加である。また、昼休みの講座 - プ

チレッスン - の受講も多い。学期ごとに通算60回ほど開講日があるが、1年生のときに春学期30回、秋学期30回、2年生で春学期12回出席している。一方、留学生S₂、S₃、S₄は3年生でJLPT、N1に合格している。3名とも日本語能力試験対策講座を受講しており、特に、留学生S₃とS₄は出席率100%である。日本語能力試験対策講座や昼休みの講座 - プチレッスン - の受講が、どのくらいJLPT、N1の合格に影響を与えているのか今後の検証としたい。

6. 結果

今回、本学の留学生の日本語力の実態をつかむために、入学時の日本語プレイスメントテストの結果をもとにまず2つの仮説の実証を行った。以前から漠然と感じられていた留学生の日本語力が年々下がっていること、そして、留学生の日本語力が学部間で差があるということである。統計学的見地から検証したところ、留学生の日本語力は下がってはいないこと、また、学部間では芸術情報学部の方が総合政策学部の留学生より日本語力が高いという結果となった。しかし、芸術情報学部の留学生は点数のばらつきが大きいことがわかった。キャンパス統合で学部間の垣根を越えたそれぞれのレベルに合ったクラスでの勉強が可能にはなったが、実際は両学部のカリキュラムの関係で、芸術情報学部の留学生が総合政策学部のクラスに入ることは難しい。留学生の日本語履修枠を両学部で共通にすることが求められる。留学生の履修する日本語は週に2コマあり、しかも2年間勉強ができる。この恵まれた環境があるにもかかわらず、レベルに合わないクラスで勉強しなければならないことは、留学生にとって決してプラスにはならない。次に、入学時の日本語プレイスメントテストの結果をもとにさらに2つの検証を行った。まず、1年終了時に行っている達成度判定テスト（2年のクラス配置にも利用）の結果との比較を行った。その結果、強い正の相関関係が見られ、留学生の日本語力は1年後も相対的に変化のないことがわかった。次に、留学生が大学在学4年間で目標にしているJLPT、N1合格に焦点を当てると、JLPT、N1受験者の得点と入学時の日本語プレイスメントテストの得点には相関関係が見られることがわかった。そこで、より具体的な関係を探るために回帰分析を行った。どの程度の得点があれば合格が可能なのか検証を行った。その結果、入学時の日本語プレイスメントテストで64点以上取っている学生はJLPT、N1に合格する可能性が高いことがわかった。ただ、決定係数R²は0.36とやや低い値であるので、それだけではない要因があることもわかった。JLPT、N1合格がどのような要因と深い関わりがあるのか、今後は留学生の日本語能力試験対策講座の履修、及びその出席状況、さらには昼休みの日本語講座 - プチレッスン - の受講との関わりをさらに詳細に調べていきたい。

7. 考察とまとめ

今回入学時のプレイスメントテストの結果をもとに統計学的な実証を試みてきた。その結果明らかになったことは、入学時のプレイスメントテスト結果でその後の日本語力の伸びがある程度予測できるということである。大学在学中、留学生の日本語力は相対的にはほとんど変わらない。絶対評価で言えば、多くの留学生の目標であるJLPT、N1合格、日本での就職を果たすこと

などが挙げられるだろう。しかし、その目標を達成できるのはやはり入学当時から日本語力が高かった留学生ということになる。ただ、今回の検証でJLPTの得点は入学時のプレースメントテストの得点からだけでは測れない要因があることも明らかになった。今回本学で作成した入学時のプレースメントテスト、及び達成度判定テストの信頼性と妥当性を検証し、概ね適切なテストであることも実証された。今後もこれらのテストを利用し、留学生の日本語力の分析を続け、留学生の日本語力を伸ばす取り組みを行っていききたい。

引用・参考文献

- (1) 荒まゆみ (2013) 「昼休みの日本語講座、『プチレッスン』 - 日本語能力試験対策講座 -」 『尚美学園大学総合政策学部・総合政策学会 総合政策論集第17号』
- (2) 石原知英 (2014) 「古典的テスト理論を用いた2012年度新入生英語プレースメントテストの分析と改善への提言」 『愛知大学語学教育研究室紀要』
- (3) 市原一裕・井上昭雄・佐藤克彦・鈴木章能・長谷川哲子・丸本嘉彦・水口和野 「これまでのプレースメントテスト実施を振り返る」 (2007) 『大阪産業大学論集社会科学編117, 31 - 75』
- (4) 今尾ゆき子 「学部留学生の日本語力と日本語科目の履修」 (2009) 『福井大学留学生センター紀要4』
- (5) 上村和美・藤木清 (2011) 「大学入学時における読解力と「日本語運用能力テスト」との関係に関する一考察」 『関西国際大学研究紀要第12号』
- (6) 遠藤雪枝 (2014) 「2013年度英語プレースメント・テスト結果」 『清泉女子大学言語教育研究所言語教育研究第6号』
- (7) 大友賢二 (監修)・中村洋一 (2004) 『テストで言語能力は測れるか～言語テストデータ分析入門～』 桐原書店 pp.99
- (8) 奥野由紀子・丸山千歌・四方田千恵 (2008) 「プレースメント・テストと学部中級大学日本語クラスに関する報告」 『横浜国立大学留学生センター教育研究論集15』
- (9) 酒井英樹・ウイスナブライアン (2007) 「Classical item analysis of an in-House English placement test : issues in appropriate item difficulty and placement precision」 『JACET 中部支部紀要 (5) 13 - 27』
- (10) 島田めぐみ・三枝玲子・野口裕之 (2006) 「日本語 Can-do-statements を利用した「言語行動記述の試み - 日本語能力試験受験者を対象として - 」」 『世界の日本語教育』 16
- (11) 竹安大・三重野佳子・船田佐央子・内山和也・松田美香 「別府大学語学教育におけるプレースメントテストの活用—2014年度分析結果から見える今後の課題」 (2015) 『別府大学日本語教育研究センター』
- (12) 田辺和子・中條清美・伊藤誓子・西垣知佳子 (2012) 「新聞コーパスを活用した日本語 DDL 教材と指導実例」 『日本大学生産工学部研究報告 B』
- (13) SHIZUKA, Tetsuhito・MOCHIZUKI, Masamichi (2014) 「日本人大学生のための標準プレースメント・テスト開発と妥当性の検証」 『JACET Journal 58』
- (14) 中村優治 「ラッシュ分析法によるプレースメントテストの一考察」 (2008) 『国際基督教大学学報. I - A』
- (15) 西内啓 (2013) 『統計学が最強の学問である - データ社会を生き抜くための武器と教養』 ダイアモンド社
- (16) 西内啓 (2014) 『統計学が最強の学問である [実践編] - データ分析のための思想と方法』 ダイアモンド社
- (17) 前田和彦 (2010) 「プレースメント・テストとしての G-TELP についての一考察 - 大阪商業大学での信頼性・妥当性に焦点をあてて -」 『大阪商業大学論集第5巻5号』
- (18) 松見法男 (2015) 『日本語教育の「堅実な」「面白い」量的研究とは - 心理学視点による実験計画と統計処理の知識』 『日本語教育』 162号、19 - 33
- (19) 宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘 (2014) 「日本語野文法能力テストの開発と信頼性 - 日本語学習者

- のデータによるテスト評価－』『広島経済大学研究論集第36巻第4号』
- (20) 目時光紀（2013）「習熟度別にみたT大学1年生の英語力の変化」『天使大学紀要 Vol.14 No.2』
 - (21) 吉川尚美（2002）「2001年度日本語プレイスメントテストの分析」『国土館大学教養論集（52）107 - 129』
 - (22) 吉田弘子（2009）「英語プレイスメントテスト分析－言語テストの観点から－」『大阪経大論集・第60巻第2号』
 - (23) James Dean Brown・和田稔（訳）（2009）『言語テストの基礎知識』大修館書店